見知らぬ世界にて、

ドミノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見知らぬ世界にて、

【Ｎコード】
Ｎ２３４３Ｗ

【作者名】
ドミノ

【あらすじ】
◆九柳大和は、異世界に召喚された。彼は元の世界に帰るため、一縷の希望に縋り、奮闘する◆無様系主人公が色々と頑張る話の予定です。見切り発車で始めてしまいました。文才皆無ですが、ナメクジのような執筆速度で頑張ります。

◆1話（前書き）

忘れた頃に更新されているくらいの執筆速度で、進めていこうと思います。
（序盤の区切りが着くまでは、週一くらいの速度で頑張ろうと思っています）

◆1話

どうして……。――と、九柳大和（くりゅうやまと）は嘆いた。
学校へ行き、友達と話して、適度に勉強して、程よい疲労と眠る。その繰り返しのはずだったのに、どうして自分はこんなところに居るんだ、と。

◆◆◆◆◆

――ピピピッ、ピピピッ。
まどろみの中に割り込んでくる目覚まし時計の音。頭のどこかでその音を聞く。しかし、暖かい布団に包まれる心地よさを手放したくなくて大和は、即座に慣れた手つきでスイッチを押して止めた。二度寝の誘惑に対して、起きなければいけない気持ちが勝った記録は未だない。

目覚まし時計を止めるために動き、肌蹴た布団から外気が紛れ込む。突き刺すような11月中旬の寒さから逃れるために首元までしっかり包まった羽毛布団は、心地よい温かさを提供してくれた。

そのことに、幸せだぁ、なんて小さな幸せをかみ締めて大和は意識を手放した。

数分後。
その幸せは剥ぎ取られた。

「起きなさい、大和」

頭の上から降ってくるような母の言葉と襲ってくる寒さに身を縮こまらせて、大和は、うぁ、などと口から意味のない言葉が漏らして拒否の意を示す。

「はぁ……」

毎日のこととはいえ、朝の弱い息子に母は呆れたため息を吐いた。

「起ーきーろー！！」
「っ、……」
「起ー！きー！ろー！！」
「分かった、起きるっ起きるから！耳の元で叫ぶなよ母さん！」

大声で叫ばれ、大声で叫び返す。

起床した大和に母は一仕事終えた顔で「おはよう」と言った。それに対して「はよ、母さん」と大和も返す。目立った反抗期も無く、一般的かつどちらかといえば良好な親子関係を築いてきた2人だった。

大和は寝ぼけ眼に洗面所で水を浴びせた後、朝食を食べるために

一階リビングへと降りた。
テーブルには、いつものようにトーストと目玉焼きが用意されている。しかし、いつもなら一足先に朝食を食べ終わって新聞を広げている父の姿が、今日はなかった。

「あれ、父さんは？」
「昨日、田舎のおばあちゃんが亡くなったから、そっちに向かったって昨日の夜言ったでしょ」

「あぁ、そうだった」と半分聞き流しながら狐色に焼けたトーストに目玉焼きをのせて噛り付く大和。小さい頃に見たアニメ映画の影響で、食べてみたいと母に頼んだことがキッカケだった。以来、手軽だからという理由で、朝食の位置に陣取っている。

付けっぱなしのテレビから、どこに在るのかも曖昧な国で起きた事件で、大量の人間が亡くなったと垂れ流されている。悲壮というより無感情が、起床したばかりの頭に染み込んだ。

「明日から土日だし、お母さんもお父さんの方に行くから」
「えっ、じゃあ今日から俺1人！？」
「もう高校2年生だから、大丈夫でしょ」
「別に1人はいいけど、ご飯は？」
「冷凍とかカップ麺があるから」
「出前とっていい？」
「物による」
「寿司」
「却下」

そんなやり取りをした後、カツ丼くらいなら頼んでもいいということで落ち着き、学校へ向かった。

２日間だけとはいえ、休日に両親がいないことに浮き足立つ大和。擬似１人暮らしの到来にドキドキと期待感が高まる。

しかしそのドキドキも、高校について今日の１時間目が小テストだと友人経由で思い出すと、急速に萎んでいった。寧ろ破裂したというべきか。膨らんだ風船を針で突いたように。

「小テストどうだった、大和」

１時間目の休み時間、１つ前の席に座る男子生徒が大和に話しかける。

「急いで詰め込んだ割には、よく出来たって感じ」
「マジ？……俺不味いかも」
「洋介はいつものことだろ？」
「うっせーよ！」

軽口を叩き合って、移動教室のために席を立つ。それから大和は少し離れた友人に呼びかけた。

「弘樹、和也。次、化学室だぞ」
「おっけー」
「すぐ行く」

いつも一緒に行動する３人と共に、大和の１日はつつがなく過ぎていく。

放課後。
最近発売されたメガバーガーとやらに挑戦するため弘樹、和也、洋介と共に大和は学校近くの有名ハンバーガーチェーン店を訪れた。
とても食べきれないという噂に流される形で挑んではみたが、口をめいいっぱい開いて一口かじれるかどうかというサイズと、胃もたれを起こしそうな肉汁とチーズを前に４人はあえなく敗北。店員もそんな客に慣れているのか、持ち帰りの袋を頼んだ４人を温い目で見ていた。

「しっかし、あんなのよく商品化したよな」
帰宅途中、メガバーガーの残りが入っている袋を揺らしながら呆れ気味に洋介が言う。
「……食べるんじゃなかった」
食の細い和也は、青い顔をして持ち帰りの袋を見ては、「憂鬱だ」と呟いている。
弘樹は電車通学なので、別の岐路についているからここにはいない。
が、岐路が別になる前、彼も同じように遠い目で袋を見ていた。揺れのひどいローカル線に乗って、えずいている頃かもしれない。
「大和、どう思うよこれ」

「どうって……、食べるの無理っぽいかも」

大和は手元の重みを感じながら呟く。絶対に何人かは食べきれなくて処分しているであろうそれは、早く食べろよ、と袋の中で言っているようだった。

「贅沢品だなぁ」

「こうでもして話題取りしないといけないのかね、飲食店って」

「こういうのってさ、貧困の国に分けたらどれだけの人が助かるって、よくテレビでやるよね」

「あぁ～、あれだろ？年間ものすごい量の食べ残しがどうとかってヤツ」

何の気なしに、漠然とそんな話題が上る。そうである事実の一端を知っているだけで、「どうにかしなければ」などという使命感なんかは、大和にも洋介にもない。

ふと思うのは、やっぱり生きる環境って大事なんだな、ということくらい。

テレビで放送され、見ればそれなりに良心が疼く。けれど、布団に包まる頃には明日の予定に塗り替えられている。2日も経てば、気ままにファーストフードを食べ、デリバリーを頼めばピザが家まで届き、処理しきれない残り物は捨てる。そんな世の中に、肩まで浸かって暢気に生きている。

やっぱり他人事。テレビ越しにあるんだな、と、大和はこういった類のことに対して考えていた。

諦観とか達観といった見栄えいいものに分類されるでなく、過ぎてしまった後悔のような、“どうにもならないもの”と一緒に仕舞

ってある考えだ。

「……うえっぷ」
「ちょ、大丈夫！？」
「うぇ、吐くなよ和也！どうしても無理なら大和のほうを向け！」
「てめ、洋介！――あぁ、こっち向くな和也！だめなら茂みに向かえって！」

そして、そんな思考も、和也がえづいたことにより簡単に掻き消えた。誰だって、遥か彼方の手に余る大事より、目の前に転がり込むハプニングで手一杯だ。

和也が未だ青い顔のまま別れ、その後に洋介とも帰り道が別々になる。
1人夕焼けの中に身をおき、両親のいない家で何をしようかと思いをめぐらせる大和。洋介とは家もそこそこ近いから、呼べば泊まりに来てくれるかもしれない、と徹夜ゲーム対戦を夢想する。

と、そこで。

「あ、今日から彗星が見えるんだっけか」

頭の隅においておいたことが大和の肩をたたいた。

「あれから何年ぶりなんだろうな……」

小さい頃、両親と手を繋いでみた箒星は思い出の中で、今でも鮮

明に弧を描いている。

よし、と大和は今夜の予定を決めた。――運が良ければ今日から見えるであろう箒星を探そう。見上げれば、夕焼けと紫が交じり合う中に、一番星が顔を出していた。

夜に向け万全の準備をするために、大和は足をはやめた。

その矢先。

――ズズッ、と足を泥に突っ込んだような感触に捕らわれる。

「……えっ？」

舗装された道では感じることのない感覚に、大和は間抜けた声を漏らす。

瞬間、引き込まれる。

足を引っ張られるように、真下へ。

大和が立っていた場所には、彼の姿は無くなっており、彼が引き込まれる瞬間に手放してしまった通学用鞄だけが残されていた。

◆2話

突然襲ってきた落下の浮遊感に、大和の脳内は一瞬白で埋め尽くされた。
絶叫マシンが急落するときの独特の違和感が、腹部に到来する。そして、ワンテンポ遅れるように悲鳴が喉をノックした。

「――！？」

しかし、声がでない。
イメージとしては水中で叫んでいるのに近い。ただ空気だけが漏れて、そのままどこかへ解けていくようだ。

「――！？――！！」

水中の中を落下していくような奇妙な現象の違和感が、気味の悪さとなって大和の心をくすぐる。――死ぬかもしれない。漠然とそう思わせる嫌な感じだ。

大和は落下に逆らうように足掻いた。
それが功を奏したわけではないが、落下の感覚が薄らいで行き、やがて止った。大和も足掻くことを止めると、浮遊感が体を支えてくれる。

――息が、出来る。
激しく運動したため肩で息をするほどに呼吸は上がっていたが、しっかりと息が出来ることに気づく。体は水中にいる感覚だというのに、問題なく呼吸は出来ていた。

――なんなんだ、ここは。
幾分落ち着いた大和の頭は、この不思議空間のほうへと思考を引っ張られた。
垂直落下、水中独特の浮遊感、声は出ない、呼吸は出来る。――おかしなことだらけだ。

ぐるり、と周りを見回す大和。

暗い。
どれくらいの大きさの空間なのか分からない、ただ暗い空間。

ただの、暗黒が覆っている。

体を反転させて後ろを見るが、変わらない。右、左、上、下、どこも変わらない。そもそも上下左右なんて意味を成していない。全方位、暗闇。

自分は今、この空間のどの位置に居る。――中心か？――それとも端か？
出口はあるのか。――あるとすれば何処に？――どれくらい先に？
落下の感覚が無くなった途端に、右も左も、上下すら分からなくなった。
そんな状態で、果てしない暗闇の中に、ポツンと1人取り残され

たように浮遊している。

――怖い。

不安と焦りが大和の心を突いた。
落ち着きを取り戻したがゆえに出来た現状把握のせいで、今度は恐怖が影を落とす。

唇が乾き、息が上がる。
思考が、悪いほうへ悪いほうへと流れ、加速する。
溢れでてくるマイナスのイメージに歯止めを利かすことが出来ない。
鳩尾に穴でも開いてしまったかのような不安感が、存在を主張する。

「――！」

それら全てから逃れたくて、大和は動いた。
どこへ向かうとも考えず、水泳の犬掻きのように我武者羅に手足を動かし、自分の中の恐怖から逃れたい一心で暗闇を進んだ。

ここは、どこだ？
今、どこにいる？
俺は、何処から落ちて来た？

前へ進む。
変化しない暗闇を掻き分けて、ただ前へ。

落ちてきたのなら、上へ行かなきゃ。
どれくらい俺は落ちた？
数十メートルか、数百メートルか？

次は、顔を上へ向けて、浮上しようと手足をバタつかせる。
けれど、変わらない。大和がどれだけ進もうが暗闇は沈黙を保っている。

――そもそも俺はちゃんと進めているのか？

そんな不安は、芽生えると一気に心を侵食し、染めていく。

「――！！――！！」

足掻く手は、何も掴まない。伸ばした手は、何にも届かない。
けれど、もがく。不安感と孤独感と恐怖に萎縮する筋肉を無理やり動かす。

――……誰かっ！

そのとき、大和の右足に触れるものがあった。

右足の足首あたりにあるなにかを感じ取って、大和は慌てて足元を見た。しかし、その場に目を凝らしてもなにも見えない。薄っすらと自分の足が確認できるだけだ。

逆さになって、何かがあった場所に手を伸ばす。

暗闇の中、確かに何かに触れたということを頼りに必死に探る。

――あった！

左手に触れる何か。それを無くすまいとしっかりと掴み、藁にも縋る思いで手元まで引き寄せた。なんでもいい、とにかく大和は手掛かりがほしかった。

「――！！」

手元まで引き寄せて確認し、大和は驚きの声を上げて仰け反る。

――手だった。やせ細り骨ばった薄気味悪い人の手を大和は掴んでいた。

その死人のような手を反射的に放す。すると再び闇の奥へと紛れていく。

紛れていく手の先に、――顔があった。

男とも女とも分からない、毛の全て抜け落ち、頬の痩せこけた人の顔。死人のように閉じた瞼は窪み、鼻は削ぎ落とされたかのようにのっぺりとしていて、唇はひび割れている。

その顔が、ぐるっと動き大和の顔を見た。

窪んだ瞼越しに見据えられ、金縛りにあったように動けなくなる大和。目など合わせてはいたくないが、体が石にでもなったかのように反応してくれない。反してその不気味な人間は、しっかりと見据えたまま大和の元へと漂い、胎児のように丸めた態勢を解いて、ゆっくりと手を伸ばす。

肋骨の浮き出た胴。
枯れ枝のように細い手足。
贅肉どころか筋肉さえ無くなり、文字通り骨と皮のみで男女の判断さえすでにつかない。

その人間の手が、大和の頬に触れる。大和の存在を確認するようにぬるりと撫でたあと、そいつのひび割れた唇がかすかに開かれた。

――見ツケタ

搾り出すような声が漏れた瞬間、そいつの目と口が大きく見開かれる。
開いた目と口の奥に目玉や歯などは無く、周りと同じただの暗闇が広がっていた。

――見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

「――！！！」

そいつの手が顔から体へと這い、歓喜するように声を上げながら大和の体を引っ張ってくる。その気持ちの悪さに大和は寄ってくるそいつを振り払おうとするが、やはり体の自由が利かない。

――見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

その手の感触はおよそ人のものと思えるものではなかった。体温を感じない爬虫類のような肌触りが悪寒を引き起こし、頭の奥で警鐘のように鈍痛が始まった。それでも、大和の体は動かない。命令系統が全てイカれてしまったかのように金縛りの状態から抜け出せない。

――見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

男とも女とも、子どもとも大人とも取れる声音で囁きながら、大和の顔真正面にやってくる。

目玉のない暗闇でじっと見続けて、――にぃ、とそいつは笑った。

――見ツケタァ

ビクッ、と大和の体が震えた。

――動く！

体の自由が戻ったと分かるやいなや、目の前のそいつを突き飛ばし、一目散に逃げようとする。しかし、そいつはすぐさま体勢を立て直し、体を反転させた大和の右足を掴んだ。

大和の目に映るそいつは、蜘蛛のような姿勢でぐいぐいと足を引っ張る。さっきまでの緩慢な動きとは比べものにならないほどの俊敏な動きは、獲物を狙う動物を連想させた。

逃げろ、と警告の言葉が脳内で点滅する。

がちがちと歯が鳴り、動悸が荒くなる。

目の端に涙が浮かび、ひゅ、ひゅ、と情けない息遣いが耳につく。

――なんで、どうして俺がこんな目に！

空いている左足でやたらめったらにそいつの顔に蹴りを喰らわし、無理やり体を曲げて、逃げるために両手で掴んでいる手を引き剥がそうと爪を立てる。

けれど離れる気配はない。

頭が真っ白に染まっていき、助けて、という言葉しか浮かばない。

ずるっ、と突然背中にのしかかるなにか。
そいつは大和の耳元で気味の悪い息遣いで息を吐く。
慌てて振り向くと、足を掴む人間と全く同じ顔をした人間がいた。
「――！！」
声にならない絶叫が吐き出される。
大和の視界に映ったものは、沈黙を保っていた暗闇から這い出てくる痩せこけた人間たち。
どれもこれも同じ姿で這い寄って来て、生に飢えた死霊のように大和に絡みつく。

――見ツケタ
――出シテクレ
――助ケテクレ

何人もの不気味な人間が、ぽっかりと空いた目を見開き、大和に手を伸ばす。

――オ前ガ出口ダ
――此処カラ連レ出セ
――マダ消エタクナイ

触れられる度、その場所から何かが体内に入り込んでくる感覚。
息が詰まり、窒息していくように呼吸が困難になってくる。
視界に霞が掛かり、意識が遠のいていく。

――出セ
――出セ
――ア　アア　ア

掠れていく意識の中、大和は右腕を突き出した。
一縷の望みもないのに、誰かが自分を引き上げてくれることを願って。

◆2話（後書き）

今は書くことが楽しいけれど、この状態がいつまで続くか……。
とりあえず、次の話に取り掛かります。

◆3話

死霊のような顔をした人間たちに這い寄られ、体の自由を奪われる大和。

爬虫類の這いずるような感触が体じゅうにあり、まるで蛇の大群が蠢いているようだ。

次々と伸びてくる新しい手が、大和の体のどこかに触れるたび、ぞわり、と悪寒が駆け抜ける。加えて、その触られたところから何かが体内に入り込み、同化してくる感覚と力が抜けていく感覚の両方が襲ってくる。

――いや、だ……

生きる気力が奪われたかのように脱力感が体を覆い、思考が真っ白になっていく。

体が勝手に生きることを放棄するかのように、呼吸が小さく困難になっていく。

――死に、たく　ない……

人間たちに埋もれていく中、辛うじて働く頭で必死に願った。

これ以上ない疲労を振り払い、人間の手が少ない右手を虚空へ突き上げる。

――誰か、　助　け　て　……

その右手はなににも触れることはないはずだった。
その右手はなにも掴むことはないはずだった。

しかし、右手はなにかに触れた。
ぐにぃ、というゴムで出来た風船のような感触で、右手を押し戻そうと微かな反発を持っている。

そして、右手はなにかを掴んだ。
ゴムのような感触をもつ壁を引っ掻くように、右手を握り込んだ。

次の瞬間。――バシャッと水風船が割れるような音と共に、大和は投げ出された。

◆◆◆◆◆

どさっ、とまともに受身も取れずに全身を地面に叩きつけられる大和。

「――ぐ、げふっげほっ！」

溺れた人間が岸に打ち上げられた時のように、口の中の液体を吐き出し、大きく息を吸ってはその反動で咽る。

「げほっ、がほっ、……っ、……、……」

ままならなかった呼吸が落ち着き、ひゅう、ひゅう、と浅い呼吸が戻ってきた。

「……、……、……」

ひどい倦怠感が大和の体を包んでいる。指の一本も動かしたくないほどだ。だらしなく半開きになった口から涎が垂れでて、頬が触れている石のような感触の床を濡らす。

そんな状態でも、なんとか意識を保っている。

眠ってしまいそうな意識を必死で巡らせ、脳に情報をおくる。

どうやらここは部屋らしい。

壁に掛けられた松明や、それに微かに照らされるレンガで造られた壁。

鼻をつく錆のような匂いと、口に残る鉄の味。

体に纏わりつくぬるりとした液体のような感覚。

大和は降りてくる瞼を懸命に開き、目玉だけ動かして周りを見る。

――コツ、コツ。
突如、足音が聞こえた。
近づいてきているようだ、と音の大きさと反響具合から察してその方向へと顔を動かそうとしてみる。が、体はいうことを聞いてくれなかった。生まれたての動物のように、未発達の筋肉がプルプルと震えるだけで、力が入らない。

――コツ、コツ。
その足音は一定のリズムで近づき、床に這いつくばるようなうつ伏せの格好の大和の頭あたりで止まった。そして、足音の主は大和の左腕を掴み、力任せにうつ伏せから仰向けへと大和の体勢を変える。

見下ろすような形で真上にある足音の主の顔は――

「ハッピーバースデイ、俺」

――大和と瓜二つだった。

予想だにしない人間が立っていたことで思考はオーバーヒートを起こしたかのように、プツリ、とそこで途絶え、疲労の海に投げ出された大和は意識を失った。

◆◆◆◆◆

「――クード！」
「――ここに」

松明が心もとない光を提供する部屋で、男が呼びかけると、壁の隅の暗闇からにじみ出るように男が現れた。男の名はクード・アニエル。王家ルナヘイルの腹心として代々忠誠を誓うアニエル家の人間である。

クードは、視線の先にいる主の横顔を見た。
名はジーク・フェイ・ルナヘイル。王家ルナヘイルの第二王子であり、２つ年下の幼馴染。そして、自分が命を掛けて守る唯一無二の主は、神妙な顔で言った。

「……上手くいったぞ」
「では、計画の変更はないのですね」

ジークは、あぁ、とだけ一言。
視線の先には、ジークと見紛う顔の１人の男が仰向けに転がっている。

「しかし、ひどい血の匂いですね」

クードは小さな部屋に満ちる匂いに、思わず眉根を寄せた。

部屋の床と壁は、一面に大量の血をぶちまけたかのような有様だ。その中に、妙な方向へ捻じ曲がった四肢や、本来あるべきものが全て削がれてしまったかのような顔といった、人間だったモノが不気味に散乱している。

「アドゥルの民の血肉を使った召喚の儀が、これほどとは」

「文献の文章を読むより、なかなか刺激的な光景だったぜ」

先ほどの光景にジークの胃が絞めあがった。――しばらくは悪夢にうなされそうだな。

部屋の魔方陣の中に立たされた１０人のアドゥルの民が次々に痙攣を始め、全身から血を吹き出す姿。それだけでなく、絶命して倒れた彼らの上に、彼らの血で出来た球体が発生し、大きくなるにつれ、倒れている彼らの体が千切れ、顔が変形し、干乾びていく。

ジークの脳裏に焼きついているそれは、御伽噺の地獄を思い起こさせる光景だった。

松明に照らされ微かに確認できる人間だったモノは、よく見ると霧のように霧散を始めていて、仰向けに倒れる男に吸収されていくのが確認できる。

「処理は、どのように？」

「このままにしておけば、１時間も経たないうちにこの人間の血肉

になるさ」
「……そうですか」

表情を変えないジークにクードは声を掛ける。

「……幼馴染として発言をお許しください、ジーク様」
「なんだ」

相変わらずこちらを向かないジークにクードは従者としてでなく、友人として言葉を掛けた。

「悪役を選ぶのか、ジーク？」
「……どうだろうな」

ほんの僅かに顔を顰めたあと、ジークはそう答えた。そして、振り返ってクードと顔を合わせる。

「ルナヘイルの国は今、漠然とした不安が蔓延している」

仄かに部屋を照らす松明の明かりに照らされた顔に、表情は無かった。
整った顔立ちと、猛禽類を思わせる強い意思の宿った目。王族の証である抜けるような蒼穹色の瞳は、松明の炎のせいか、微かに揺れているようにみえた。

「親父は不治の病に伏せ、兄貴は殺され、統治者の第一候補が放蕩王子ときちゃ、無理もない」
「放蕩王子なんて国民が流した言葉を自分で使うなジーク」

友人として、ジークが自分のことを卑下するのは腹が立った。しかし、力強くジークは笑って「そう思われることをしてきたから仕方ないだろ」と言う。理由を知っているクードとしてはなにか言ってやりたいが、本人がこの調子ではなにも言えなかった。

「まぁ、予定通り進めるためには、この人間の力が伝承通りか確かめる必要がある」

「使用する場所は、予定通りカラード地下実験室で」

ジークは振り返って、気絶している自分と同じ顔をした異世界からの人間を見つめた。

「こいつへの対応も予定通りにする。文献通りなら記憶の吸収が可能なはずだ」

「余計な感情を持たせないために、ですか」

「あぁ……、こいつの記憶から、こいつが最も『帰りたい』と思うような対応を考える」

それからジークは、ぽつり、と独り言のように呟いた。

「国民は力を持った王を求めている。
絶対的な安心を提供してくれる王という象徴を。
それが俺の仕事であり役割なら引き受けてやる。
そのための犠牲になってもらおう、異世界の人間」

ジークは飄々としていて生真面目な人間ではない。しかし、民よりも貴族の闇を見据え、貴族よりも民の苦しみを見て生きてきた。
表舞台に立つ気などなかったが、こうして自分に役が割り当てら

れてしまった。王族として荷を背負えと突きつけられてしまった。

なら、力ある者として力を振るおう。

自分の両手が広がるなら、役割を引き受けよう。

自分の大切なものを、大切な人を守ることができるのなら、何だろうと利用してやる。

悲哀ともとれる覚悟を含んだ声音にクードは、従者としてこの主を見続け、友人としてこの幼馴染の傍にいようと、密かに決意を新たにした。

◆4話

――――ピピピッ、ピピピッ。
目覚まし時計の音が聞こえる。
反射的に右手が伸びて、スイッチを止めた。

いつもの朝だ。
外気の冷たさや布団の感触など、たいした変化をみせない普通の朝。いつもなら羽毛布団に身を包み、まどろみに身を任せる。

けれど二度寝しようにも、大和は目が冴えてしまっていた。

嫌な夢を見たせいだ。

大和はその内容を思い出し、顔が半分隠れるほどまで掛け布団をたくし上げて身を縮こまらせる。布団の端をぎゅっと握り締め、震える体を落ち着かせる。きつく目を瞑ると、恐怖心が薄らぐ気がした。

「起きなさい、大和」

母の声。
聞きなれたはずのその声に、じわっ、と安堵の感情が大和の心に広がる。――あぁ、悪い夢は覚めたんだ、と。

ゆっくりと目を開ける。いつも通り始まる朝に「おはよう」をを告げるために。

「オ゛キ゛ロ゛ォ゛ァ」

眼前に広がる顔。
見開いた目に目玉はなく、開いた口に歯も舌もない。
ただぽっかりと暗闇が広がっている、死霊のような不気味な人間の顔。

「ひぅっ、……ぅうぅぁあああああああああ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！！！——」

◆◆◆◆◆

「——うあああっ！！！」

絶叫と共に大和は跳ね起きた。

「……はっ、……はっ、……はっ」

激しい動悸に、眩暈と耳鳴りが付きまとう。
左手を額にあてると冷や汗を大量にかいている。
けれど、そんなことよりも恐怖に体が震えて、みっともなく歯がガチガチと鳴った。底冷えするようなあの気味の悪い声が、頭の中から離れずに反響し続け、大和の心を掻き乱す。

大和は自分の体を抱きかかえるように腕を回し、ぎゅっと力をこめた。冷や汗の不快感や生々しく感じる自身の体温など、震える大和に現実が覆いかぶさってきた。

「起きたか」
「――っ！！」

突然横から声を掛けられ、大和は飛び退くように声の主を見た。

「――お前！？」

1人の男が立っている。

「意識は、はっきりしているみたいだ」

そいつは顔の造りから背格好まで、目視できるもの全てがそっくりだった。
いやそれだけじゃない。声も、まるで自分の声を録音して聞いているかのような違和感があるものの、紛れもない大和の声だ。

その鏡でも見ているかのような瓜二つの顔に、大和は驚きに口を開閉し、なにか言おうとしたが、声が喉に詰まって意味のない音が漏れただけだった。

ただ違うものは、目と髪色くらいだろうか。――大和の目元に鋭さを付け足したかのような猛禽類のような青い瞳と、白金を思わせるような煌びやかなプラチナカラーの髪の毛が目を引く。

羽織っている茶色の外套がとても似合わないと思わせる、高貴さと気高さがその男にはあった。

「ぁっ、ぉ、お、お前は、誰だ？」

「ふむ……、言葉はちゃんと機能しているし、魔力も充分感じられる。ってことは概ね理想通りだな」

大和を観察するような視線を向けながら、男はぶつぶつとなにかを言う。その男の行動から大和は、警戒を強め、冷静さを少しだけ取り戻した。

いざとなれば逃げ出せるように周囲に視線を這わせる。

灰色の壁でできた部屋。全体を照らしているものは、天井に埋め込まれた光を放つ鉱物らしきものだ。

他には、人一人乗せることの出来る台に薄い布団を乗せただけのような簡素なベット。大和が横たわっていたのは、その部屋に置かれた3つのベットのうちの真ん中にあるものだった。

イメージ的には病室が近いかもしれない。しかし、病室のような白一色の清潔感はほとんど無く、灰色の無機質な冷たさが、大和には強く感じられた。

部屋の出口は男の後ろにある。つまり、強行突破するには男をど

うにかしなければいけない可能性が高い。

――ん？

と、大和の目が止まった。

ドアの横に木でできた簡単な棚があり、そこには見覚えのある制服が一式とメガバーガーの入った袋が置かれている。――……、えぇ！？

大和はここで初めて気が付いた。――自分が一糸纏わぬ姿でいるということに。

「寝ているあいだに、持ち物検査と身体検査をしたからな」

「……っ」

いつから独り言を止め、こちらを観察することに専念していたのだろうか。男は、大和がギリギリしか隠れていなかった股間を隠すように慌てた瞬間を見計らったかのように声を掛けてきた。

「もう、現状把握はいいのか？」

「……」

気味の悪いヤツだ。

大和は奥歯をきつく噛み、男を睨むように見た。けれど大和の睨みなど軽く受け流すようにして、その、そっくりな顔はまるでこっちを見透かすように視線を投げかけている。

「こ、ここは、どこ、ですか？」

警戒を解かずに、男に問う。唇が乾いていて、少し動かそうとすると引き攣るような感触がした。恐怖心が燻っていて、言葉が一々喉に痞える。だが、地獄の住人らしきものに纏わりつかれたことに比べたら幾分考えをめぐらせるだけの余裕があった。

「お、俺を、誘拐、したんですか？」

誘拐、拉致、監禁。

大和の頭にまっ先に浮かんだことだ。――けれどなんのために？

自分には大した利用価値なんてない一般人だ。大物政治家の息子や、資産家の家出身でもない、一般家庭に生まれた、ごくごく普通の高校２年生男子だ。

なのになぜ？

金銭面に難を抱える人間が追い詰められて突発的に犯行に及んだのだろうか。ともすれば、大和はたまたまそこにいたから、という理由で今この場所に連れて来られた可能性が一番高い。

「身代金か、なにかが、目当てなんですか？」

しかし、男の様子はどうだ。

こっちの問いに答える素振りもなく、余裕を含んだ表情で大和を観察でもするかのように見ている。髪にも艶があり、頬もこけてはいない、どちらかといえば裕福な過程育ちの印象を与える。

それに、そもそも見た目が瓜二つということは、年齢も近しいと考えるほうが自然だ。高校生の大和を基準に考えると、１５～１９

がいいとこだろう。そんな若者が誘拐なんてするだろうか。

「あ、あの……、なにが、目的――」

「九柳大和」

「――っ、え？」

「誕生日は６月１８日

現時点での年齢は１７歳

身長１７５センチ、体重６０キロ

両親の名前は、善次郎と恵美子。

幼馴染は、高槻洋介。

友人関係は浅く広く、概ね良好。最も親しい友人は内藤和也と工藤弘樹。

勉強は平均より少し上位。だが、とっさの機転が利くと周囲によく評価される。

運動はいたって平均値。陸上をやっていたが、中学卒業を期に本格的に取り組むことはなくなった。

趣味は最近サボリ気味の早朝か夜間のジョギング、読書、ネットサーフィン。

――で、間違いないな？」

「な、なんで……！？」

男がすらすら話したことは、間違いなく大和のことだった。

「記憶の吸収も、問題なく出来ている。……あとは――」

「な、なぁ、なんだよ！なんで俺のことを知ってるんだよ！？」

調べたのか。――なんのために。
突発的な犯罪か。――そうは思えない。
計画的犯罪か。――それこそ、なんで俺なんだ。

「お、お前は何者だ！？……教えてくれ、なんで俺はこんなところにいるんだ！？」

大和が男に掴みかかろうとした瞬間、ビキィッ、と嫌な音が耳の中で響いた。

「いっっ！？」

胸の、鎖骨のあいだ辺りに、釘でも打ち込まれたかのような鋭い痛みがはしり大和は思わずバランスを崩してベットから転げ落ちた。

なぜ痛みがはしったのかは分からない。しかし、とてつもない痛みだ。

片手で胸を押さえ、もう1つの手を床に着いて男を見上げる。佇む男は、片方の掌を上に向けるようにして構えていて、その掌には、青白く光る光球が浮かんでいた。

なんの光だ、と大和が疑問に思うとほぼ同時に、男はその光球を強く握る。

次の瞬間。
大和を激しい痛みが襲った。

◆5話

光球を男が掴んだ瞬間、今まで感じたことのないほどの激痛が、全身を駆けた。

「う〝ぁ、ぐあ〝あ〝っ〝っ〝！！！？」

体が支えられず、床に芋虫のように転がる大和。

先の胸の痛みなど蚊に刺された程度にしか感じないほどの激痛だった。

まるで神経を剥き出しにされて刃物で擦られているような、まるで皮膚を剥いでいくかのような、表現できない痛み。

体が引き攣るようにエビ反りを起こし、手足が痙攣する。

視界が涙に滲み、喉が引き裂かれるような絶叫を繰り返す。

激痛。――痛い

鋭く激しい痛み。――痛い！

意識が刈り取られる――痛いっ！

けれど気絶さえ許してはくれない――痛い〝っ〝！

足元でもがく大和を見下ろしながら、男はぐっと光球を握る力を強めた。

萎縮する筋肉。流れ出る涙、鼻水、涎。ぶちぶちと音を立てる意識――い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、い゛た゛い゛、「い゛っ゛っ゛う゛う゛う゛う゛う゛う゛う゛う゛あぁぁぁっぁあ゛っぁぁぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛、あ゛あ゛あ゛あ゛、、！！！！」

大和がもがき苦しむ様子を沈黙したままその経過を観察し、確かめるようになお握る力を強めていく。

「、、、、、、、、、、、、、、、！！！！！」

もう叫び声さえでなかった。

食いしばった歯の隙間から、壊れたスピーカーのような喉の音が流れ出るだけだ。

「……ふぅ。これだけの効果を発揮してくれているなら上々だな」

男は一言そう呟くと、その成果を見て納得が得られたのか、やっと手を離した。それと共に、掌の上の光球も消え去る。すると、大和を襲っていた激痛も嘘のように無くなった。

「がぁ゛っ、ぁ゛、あぅ゛、……ぁ゛、……、……」

少しのあいだ余韻に呻いたあと、荒い呼吸が大和に戻ってくる。肺が萎んでいたかのように空気を求め、必死に息を吸い込むと、今度は胃が捩れるような感覚が到来して、軽く嘔吐した。横たわっていたためか、鼻のほうにも胃液が逆流したが、そんなことどうでもよかった。ぼやぁっと歪む景色をただ収め、必死に息をすることで精一杯だったからだ。

「九柳大和」

頭上から投げかけられる男の声に、ビクッ、と大和は反応する。痛みによる恐怖で、男を見る大和の目に怯えが混じっていた。

「ここでは、これが俺とお前の力関係だ」

男が見せ付けるように手を伸ばし、再び掌の上に光球を出現させる。

「ぐぅっ！」

ビキィッ、と耳の奥で嫌な音が響き、呼応するようにして、男に掴みかかろうとした時と同じ痛みが同じ場所にはしった。

「な　ん、だ……、　こ　れ？」

さっきは頭に血が上って気づかなかったが、よく見ると大和の全身に、まるで拘束するかのようなに鎖文字のような模様が淡く光る

光球と同じ色で発光し、浮かび上がっている。元を辿ると大和の胸元に集約されていた。左胸、心臓の辺り。そこには掌大の魔方陣が浮かび上がっている。

まるでアニメのような光景だが、現実味がありすぎていて夢だとは思えなかった。激痛で頭がぼんやりとしていて、思考する力が上手く機能していないだけかもしれないが、それを差し引いてもだ。

「分かったか、九柳大和」

男が光球を握る素振りをしてみせたから、慌ててゆるゆる首を振り、肯定の意を示す大和。それに満足したように男は光球を消した。体にあった魔方陣も同じように消えていく。

「さて、色々と思ってることもあるだろうが、まずは服を着て落ち着け」

シニカルに笑って男は言う。

どの口が言うんだ、と大和は噛み付こうとして、寸で言葉が喉から出てこなかった。反抗すればあの激痛をまたこの男が与えてくるのではと思ったら、従っておこうと心が萎縮してしまった。

「俺は、ここを出て左に直進したところの部屋にいる。落ち着いたら、聞きたいことを聞きに来るといい」

それだけ言い残して男は部屋から出て行く。

1人残された大和は、しばらく動けずにいた。体の痛みはとっく

に無くなってはいるが、幻痛に体が反応しているかのように、時々筋肉が在り得ない方向に引き攣っては、動こうという気持ちを削いでいく。

その回復を待つために少し今後のことを大和は考えた。

頭を巡るのは、あの男は何者だということ。

次に、ここはどこだということ。

最後に、自分はなにをされたのかということ。

男は聞きに来いと言った。言い換えればそれ以外の選択肢はない、と半ば強制のような台詞であり、大和が逃げるという選択肢を取ることがないと思っているかのような態度だ。

実際、大和は逃げようという考えを浮かべ、真っ先に取り消した。

痛めつけはしたけれど殺しはしなかったということは、人質といった利用価値が向こうにあるから。なら、警察に期待したほうが一番助かる可能性がある。加えて、あの魔法のような力で激痛を与えることができるのだから、どれだけ逃げようともこっちの動きを封じてすぐに見つけ出されてしまうような、嫌な予感がしたからだ。

――魔法……？

大和の中にある１つの可能性が生まれるがすぐに、そんなはずはないと、その中学生の空想のような在り得る筈がない可能性を否定した。

「――くそ……」

そろそろ動いてみようとして、ぐっと体に力を込めて立ち上がろうと踏ん張る。

間接がぎりぎりと軋みを上げ、内臓がぐにゃりと動いた。

「うっ、ぐうぇ、――げほ、げえ、うえ」

さっきよりも大量に逆流してしまい、すっかり胃の中が空っぽになる。吐瀉物の中には少量の血と食いしばったときに欠けたのであろう奥歯が混じっていた。

涙やらなにやらで汚れた顔を拭って、なんとか立ち上がるが、上手く力が入らなくて大和はベットに仰向けに倒れこんでしまった。

「なんなんだよ……」

弱音半分愚痴半分の言葉が零れる。

どうして大和がこんな目に会っているのか。

その答えをあの大和と瓜二つの男は知っているはずだ。そして聞きに来いと言ったということは、少なくとも答える気はあるらしい。

しかし、信用してはならない。

現状だけで考えれば、大和にとって危害を加えてくる危険人物であり敵の可能性がとてつもなく高い。

男が正しい答えを言うとは限らないし、都合のいいように捻じ曲げて教えてくるかもしれない。けれど、大和には圧倒的に情報がないことに加え、反抗する術がない。映画の主人公よろしく相手の虚を突いて優位に立ったり、逆転の一手を打ったりなんて出来っこないこと、考えずとも分かりきっていることだ。

出来ることが限られている、と、大和は呻いた。

可能な限り相手を刺激せず、その上で自分の知りたいことを聞き、相手の要求を聞く。

「――無理だよ……」

考えてを纏めた言葉は弱音だった。

そんな交渉の真似事、一介の高校生には荷が重過ぎる。

そして、何より怖かった。

相手は正体不明で。

十中八九犯罪者で。

単独なのか、複数なのかも分からなくて。

方法は分からないが、簡単に大和を痛めつける力がある。

「そんなの、どうやって相手にするんだよ……」

1人で、しかも、持っているものといえば学ラン制服一式に、ハンカチ、メガバーガーのみ。これといった武器らしき物もなければ、武道の経験なんて体育の時間に少々経験した程度だ。

硬いベットの上で大和はぎゅうと赤ん坊のように体を丸めて、夢なら覚めてはくれないだろうか、出来ればこのまま消えてはくれないだろうかと願ってみる。

そうしてから5分ほど経っただろうか。

――バスッ、と、大和は布団を殴りつけた。

こうしていても何も変わらない、と恐怖心に見てみぬ振りをし、
無理やり自分を奮起させて制服を着るためにベットから起き上がる。

あの男の下へと行くために。

◆6話（前書き）

設定を考えるのが凄い楽しい。
だけれど、設定を文に起こすのは難しい。

◆6話

制服を着て、大和は廊下へと出た。

冷たい雰囲気がする、薄暗い、灰色の廊下だ。

道幅は人が2人すれ違える程度だろう。

光源はさっきの部屋と同じで発光する鉱物のようなものであり、その光が淡く頼りなさげなものだから、無機質な灰色の廊下と相まって廃墟を思い起こさせる。

いや実際、ここは使われなくなって久しい建物なのだろう。

朽ちかけていて向こう側が見える扉や、隅に張る蜘蛛の巣が物語っている。

一歩踏み出す度に、空恐ろしくスニーカーが地面を踏む音が反響した。むなしく響くそれは、この場所の雰囲気に妙に合っていて、やけに強調されて聞こえる。

ふぅ、と大和はボタンを1つ外した学ランの首元に人差し指を入れ、着心地の悪さを緩和させようと、ぐいと動かした。もう結構な期間着ている制服からする違和感が気持ち悪い。その違和感の正体は……、

……やっぱり直接学ランを着るのは気持ち悪いな。

地肌に直接学ランを着ているからであった。

なぜ、学ランの下にYシャツを着ていないのかというと、単純に

Ｙシャツが着れた状態になかったからだ。別に大和とて、好き好んでこんな特殊な格好をしているわけではない。

大和がＹシャツを着ようと手にとってみると、白かったはずのそれは大部分が赤く染まっていたのだ。触り心地もごわごわとしていて、曲げるとばりばりと音を立てる。それに加えて、血生臭い匂いを放っていたため、大和は着ることを断念した。

いや、臭いに関しては制服全てにあった。まるで、それを着たままどっぷり肩まで血の海に浸かったかのような……、とそこで大和は考えることを止め、背に腹は代えられないと一番着ることを遠慮したいＹシャツのみ除いて、制服を着たのだった。

そんな経緯があって大和は今、廊下を歩いている。

左に直進して突き当たりの部屋にいる、というアバウトさが見え隠れする説明だったが、迷う心配はなさそうだ。部屋を出てすぐに左を向けば、真っ直ぐ先に扉が確認できた。距離にして５０メートル前後であろうか。学校舎の廊下の端から反対端を見た感覚に近い。

ちなみに右を向いたら小部屋１つ分くらいの距離があるだけで、行き止まりになっていた。

分かれ道は、少し先の右側に一箇所しか無い。

全体で見れば、左右のバランスの悪いＴ字のような廊下である。

一歩、また一歩。

歩みを進めるたびに、気が重くなるのを大和は感じていた。
部屋を出るとき、決心をつけてきたはずだった。しかし、扉との距離が縮まるにつれてその決心がぐらつき、壊れてしまいそうになる。恐怖というものは、簡単には拭えないものだ。見てみぬ振りをしたところで、そのまま消えてくれることはない。

あの扉を開けたら、ぐさり、と殺されはしないだろうか。
単なる愉快犯で、こっちに希望を持たせてから突き落とすのだろうか。

大和の頭の中で、恐怖で肥大した思考のせいか、悪い結末が浮かんでは消えを繰り返している。

目的の部屋の前までたどり着いた。
けれど、立ち尽くしたままで、両開きの扉へと手が伸びない。

「……、」

口内の少ない唾液を、音を立てて飲み込む。

ドンッ、とたいして大きくもない扉だというのに、妙な違和感を覚えるのはやはり、

「ビビッてるな」

ということだ。

「すぅ……、はぁー」

大げさともとれる深呼吸をして、大和はきつく扉を睨んだ。

心の中で奮起する。

大丈夫、きっと助けは来てくれる。頑張ってください、国家権力。

大和は扉に手を伸ばした。

◆◆◆◆◆

両開きの扉を押し開けて入った部屋は、部屋というには大きすぎた。バスケットコート1つ半くらい、体育館より少し小さい程度の広さとでも思えばしっくりくる。

2、3歩室内に踏み込み、辺りをグルリと見回す大和。

「いない……」

同じ顔の男は、ここにはいなかった。

「騙されたのか？」

当然の疑問を口にする大和。

だだっ広いだけで何もない。いや、よく周りを見れば、右の壁の一部がガラスらしきものになっている。この位置からでは光の反射で向こう側はよく見えないが、なにがあるのだろうか。

大和が、その場所へ行こうと歩みを進めたすぐ後、後ろでごごごご、という音が聞こえた。

振り向いて音の原因を見ると、

「――なっ！」

壁が動いて、扉を飲み込んでいた。

「ちょ、ちょっと待って！」

あり得ない。

あり得ないが、現に目の前で扉がもう消えている。

走り寄って、大和はその扉があった場所を触る、叩く、軽く殴ってみる。――なにも反応しないただの壁になっている。

「嘘だろ」

閉じ込められた。

ぐるり、と見渡してみるが出入り口は、たった今壁に飲み込まれてしまったあの扉のみ。そして、なんとも馬鹿げた話だが、その扉は壁へと飲み込まれてしまった。

多少混乱はしたが、今は考えることは止そうと頭を切り替える。いろいろなことが立て続けに起こって頭のネジが何処かしら緩んでしまったのか、すんなりと頭は壁が動いた事実を受け入れてくれた。

さて、と大和は唸る。

嵌められた、……と考えてよいのだろうか。

あの男が、俺をここに閉じ込めてなんのメリットになる？

『や、九柳大和』

「……っ！」

突然、あの男の声が響いた。拡声器を使って何処からか放送を流しているような印象だ。

『悪いね、問答の前にちょっとした検査をさせてもらうよ』

男の言う検査とはなんなのか。

大和が疑問を口にする前に、向かい側の壁がごごご、と唸りを上げ、通路が現れた。

そっちへ行けってことか？

大和は開かれた通路へ向かう。が、その通路は大和のために開かれたわけではないと、すぐに思い知ることになった。

「え」

通路の中の暗がりに光る双眸と、低い唸り声。
たたっ、と俊敏な動きで走り出てきたそれは、鼻をヒクつかせながら周りを見回した。

「……い、ぬ？」

焦げ茶色い毛並みをした、大型犬サイズの四足獣。しかし、大和が見慣れている犬というものとそれは、違うように感じた。

全体的に短めの体毛だが、頭頂部から尻尾までの背骨のラインにタテガミのような雄雄しい剛毛が生えている。口元に見え隠れする牙は、大きくはないが獲物を狩るための実用性を重視したかのように細かく、かつ鋭い。隙間からは白く濁った涎が垂れでている。腹を空かせているのだろうか。

「……、……っ」

ごごご、と犬の後ろで口をあけていた通路が壁に飲み込まれていく。

密閉された空間に、人間一人と獣一匹。
大和は、背中に冷や汗が流れるのを感じ、無意識に半歩下がってしまった。その微かな挙動が、獣の注意を引く。

大和を視界に入れ、低く喉を鳴らす獣。
飛び掛る機会を窺うように身を低くし、見据えながらゆっくりとだが確実に追い詰める動作で、距離を詰めてくる。その様子だけで、大和の中に押し込めた恐怖があふれ出す。

『九柳大和』

男がなにか言う。けれど、それに注意するだけの意識が余分にない。

一時でも注意を放してしまえば、きっと食いつかれる。生存本能とでもいうべき感覚が大和の心の中で警鐘を鳴らし続けいているため、視線を外さずにゆっくりと後ろへ下がることが精一杯だ。

『さぁ、生き延びてみろ』

――ヴォオ゛ッ！

「ひっ！！」

獣が吼える。

その威圧に、下がる足を絡めてしまい、大和は尻餅をついてしまった。その隙を獣は逃すはずもなく、大和を食い殺そうと一気に速度を速め、飛び掛った。

「うぁぁ！！」

慌てて、這うようにして動き、獣の初撃は辛うじてよける。

横数センチのところに獣が着地したことにより、獣臭と唸り声が大和の感覚を揺さぶった。

「ぁぁっ！！？」

半ばパニック状態の大和。一層リアルに感じられる獣の質感と、

如何にかしなければ喰われるという思考がないまぜになって、無茶苦茶に腕を振り回した。

ギャンッ！！

と、獣が鳴き声を上げて軽く吹き飛ぶ。カウンターのかたちで、顎に腕が入ったのだ。

しかし、とても冷静とはいえない大和には、なぜ獣が吹き飛んだのかは理解できなかった。ただ、好機だとしか思えない。

逃げなければ、とその瞬間に脱兎のごとく駆け出す。

それが、いけなかった。

背を向けてしまったのだ。

獣は大和の背を恨みがましく睨むと、駆け出し、一気に距離を詰め、

「ぎゃぁあぁあ！！」

大和の右太腿に、深く喰らいついた。

◆7話（前書き）

用語の説明など、近いうちに説明回を設けます。

◆7話

「ありゃ、やっぱ戦い慣れしてないか」

喰らい付かれた大和を見て、ジークは少しばかり期待はずれの混ざった声音で言った。

しかし予想していた結果である。記憶の吸収をして大和がどんな人間で、どんな生活下で過ごしてきたのか、あらかた把握していたからだ。

「……どうしますか」

クードが、透明な魔術壁の向こう側の光景から目を反らさずに指示を仰ぐ。

「いや、まだ助けに入るには早すぎる」

ジークも同じように向こう側の光景を見据えたまま言った。

視線の先で大和は、足に喰らい付いているワーウルフの鼻先を殴り飛ばしていた。

完全に錯乱した素人の動きである。しかし、どうやら筋力は相当なものらしい。偶然のカウンターの時といい、顎の力と足腰が強靭なことで知られる『古狼の眷属』の一種であるワーウルフを1．5メートルほど吹き飛ばしている。大男の鍛え抜かれた大木のような太腕ならまだしも、あの細腕からは考え難い力だ。

……これも、召喚されし異世界人の力か。

しかしそれだけだ。運は、まあまあ味方してくれたようだけれど。

『古狼の眷属』種は本来群れを形成する。そして、余程のことがない限り1匹になることはない。数匹の群れの中にリーダーが存在し、統率の執れた行動の元に狩りをするのが特徴だ。

ワーウルフとて例外ではない。ある一点を除いては。

ワーウルフは『古狼の眷属』種の中でも、リーダークラスは別として個々ではそれほど力はない。その代わり群れの連携は恐ろしく脅威であり、その基礎である階級意識がとても高い。そういった生態の種であり、規律を乱す者は群れから追い出される。

問題は、その追い出されたはぐれだ。よくある話が、別の種に食い殺されて終わりというものだ。生き残る確立は低い。

しかし生き延び、極限まで腹を空かせるとどうなるのか。

考えられないほど身体能力が跳ね上がって凶暴になり、理性を失って、同族だろうがなんだろうが喰い散らかすのである。

空腹が収まっても、個体差はあるがその状態が一定の期間続き、仕舞いには新しい群れを形成しているか、適当な同族の群れのリーダーを食い殺し、新しいリーダーに居座っているかだ。

その点大和は運がいいほうだといえる。

後ろを向いた大和は右太腿に喰らい付かれた。初撃のカウンターの攻撃力から考えて、相手の機動力を削ぐことを優先したのだろう。つまり、ワーウルフはまだ理性を失うまでには至っておらず、日和ったおかげで、大和が生き延びる可能性が生まれたのだ。

定石としては、開いた距離を詰めさせないために魔術で一気に仕留めてしまうものなのだが……。大和はそれを行う気配がない。

「……もしかして、まだ自身の内にある魔力に気づいてないのか」

その可能性に、ジークは思わず歯噛みした。

あれほど内に渦巻く大量かつ高密度の魔力なら、使い方は分からずとも、ただ相手にぶつけるだけでダメージは出る。しかし、大和はその強大な力に気づいていないのかもしれない。

「あれだけの魔力なら気づかないほうがおかしいだろ」

こちらの世界の住人は、自身の内の魔力なんて、量はともかく存在自体とその動かし方は物心つくころに違和感として感じ、本能的に理解することができる。加えて、文献には魔術にたいして類稀なる才があるなどと書かれていたものだから、ジークはすっかり失念していた。――魔力の存在に気づかないということを。

「……っ」

ジークがこれから行う計画において、大和は代えの利かない大切なキーであり、重要な駒だ。だからこそしっかりと把握しておかなければならない。何が出来て何が出来ないのか、そして何処まで出来るのかと、どの程度の力を持っているのか。

かつて一度だけ、大国が生まれる前に召喚された異世界の人間に

ついて書かれた文献曰く。

その者、身にそぐわぬ力を宿す云々。
その者、類稀なる魔を持つ云々。
その者、傷つくことを知らず云々。
つまり、外見からは想像し難い力を持ち、魔術に関する才能も抜きんでていて、傷つくことはない。ということらしいとジークは踏んでいた。

それが真実ではない場合。
所謂、英雄の神格化というものだった場合だ。
今となっては異世界の事実は隠され、大陸統一の英雄である異世界の人間は御伽噺として、存在を作り変えられて一般人に認知されている。英雄が異世界の人間だと知っているのは王族とその近縁者のみのはずだ。

もし、異世界の人間だということを隠蔽するため、当時の誰かが神格化させるような文献を残していたとしたら。――その場合、大和を失うわけにはいかないので、命令1つでクードが助けに入れるよう準備をしてある。

大和が文献にそった力を見せたのは、いまのところ腕力のみだ。
魔力なんて宝の持ち腐れ状態であり、傷だって付き放題である。

俺の認識が少々甘かったのかもしれない。

「……クード」

と、声をかけるとほぼ同時に、ジークは喉元まででかかった言葉

を飲み込んだ。大和を観察していたクードも息を呑んだことが空気と共に伝わる。

その視線の先では――。

◆◆◆◆◆

「ぎゃぁあぁあ！！」

大和は何度目かも分からない悲鳴を上げ、前へ倒れ伏した。

右太腿に生温かさを持った激痛が存在している。その温度は熱となって首筋へと駆け上がり、脳髄に叩き込まれた。

「づ、っああ！」

振り返ると、血走った目で獣が足に喰らいつきながら見上げている。そして、今にも喰い千切らんばかりに唸り声を上げ、肉を引き剥がそうとしている。

「はなせっ、はなせよ、このっ！！」

痛みでじんわり涙が滲む。

アドレナリンの過剰分泌だろうか、脳が熱を持って上手く働かず、ただ怒りにも似た感情で目の前の獣目掛けて拳を振り下ろした。

くぐもった叫びをあげ獣は、

「うぐぁぁあ゛！！」

ぶちぶちぶちっ、と大和の肉ごと吹き飛んだ。

「ぁ、ぐ、ぐふぇ、ぁあ」

涙と鼻水で奇妙な嗚咽が漏れた。

灰色の床に大和の血溜まりが広がっていく。

殴り飛ばした拍子に持っていかれた右太腿の殆どは、生々しく花開いたかのように筋肉を露出し、止め処なく血を吐き出している。その中に混じって骨も見える。傷は深い。

だが不思議と、痛みは感じないほどに小さくなっていた。動かない、という違和感しか感じることはない。

殴り飛ばされた獣は、少し痛みにもがいた後、大和の肉をあまり租借することなく、ほとんど丸呑みのようにして飲み込んだ。開いた口元から垂れ出る涎に血が混じっている。

獣は、美味そうに喉を鳴らした。

目の前にご馳走が転がっているとでも言うように。

「うぅぁ、っ、こ　い　、つ……」

異常なほどの高揚感と怒気。
大和の中に渦巻く、静かに荒々しい力の奔流。

間近まで迫った“死”が、大和に恐怖と痛みを忘れさせ、根本的な感情と生き残るための術を引きずり出す。

死にたくない、生きる。
必ず生き残ってみせる。

左足を頼りにして、ぐっと這い上がり、立ち上がる。
右足は辛うじて動くのみで、ほぼ繋がっているだけだ。

俺は、生きる。

渇望。
それだけが大和を動かした。今度は獣から目を反らさず、睨むようにして。

「……俺を、食いやが　った　な」

ヴヴォァ！

獣が吼えた。

「ぁあああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」

威嚇するように。自分を鼓舞するように、大和も吼えた。

やれる。こいつを殺せる！

自信が大和に満ちている。倒せる根拠などない。けれど大和は確信している。

こんなにも、力が溢れているじゃないか！

ずるずると渦巻く得体の知れない熱が体内を駆け回っていることが、そう思わせていた。

ダンッ

大和は右足を踏み出した。その異状に気が付かないまま、目の前の敵に向かって突進する。

そう、まさに今、異状が起こっているのだ。

動かすことが出来ないほどの傷を受けた右足。だというのに、なんなく大和は動かしてみせた。大きな矛盾だが、その答えは簡単だった。

まるで肉が溶けていく映像を高速逆再生したかのように、傷が治癒しているのだ。

◆8話（前書き）

初戦闘描写なんで上手く書けない。
こんな出来じゃ申し訳ないから、練習しなくては。

◆8話

大和は自身に起こっている異状など全く気にしないまま、目の前の獣に戦闘を仕掛けた。
ふわふわとした高揚感が体を包み、今ならどんな無茶だろうと簡単に出来る気がしてならなかった。“在りえないこと”を“在りえること”にするだけの力が備わっているという錯覚が支配する。
だからなのだろう。自身の身に起こっていることだというのに、その異状を見過ごしているのは。
大和にとって、むしろその異常は正常なものなのだと勝手に認識し、受け入れてしまっている。

戦う、殺す、勝つ、生き残る。
今、大和を動かすのは、かちかちとスライドショーのように入れ替わる短絡的な思考と、滾る力の奔流だ。

「あああ！」

身を低くし、飛び出すように前進して距離を詰める。そしてその勢いを殺さぬまま、体重を乗せ、威力を上げた拳を獣の眉間目掛けて打つ。

が、獣とて大和の速いだけのパンチを受けるほど鈍い生き物ではない。
その拳を避けてみせ、バランスをほんの少し崩した大和の隙を突くように大和の肩へ爪を突き立てる。

「ぐっ、ぅ」

肉を突き刺される痛み。

痛みに怯む、しかしそれも一瞬のこと。

獣の爪が肩の肉を抉り出す前にその前足を掴み引き寄せる。そして追撃とばかりに噛み付こうとしている獣の鼻先にヘッドバットを見舞い、怯んだところを蹴り飛ばす。

大和の肩の傷は右足のときと同じように再生を始め、瞬時に痕も残らないほどに完治していた。

獣は立ち上がり、ほんの一瞬大和を睨む。そしてすぐ、攻撃を仕掛けた。

直進する獣。

その速度は、大和がみせた瞬発力に劣らず脅威的である。

鋭い爪を立て、大和に飛び掛る。

その跳躍が見えてはいるが、見てから動くため、やはり今一歩反応が遅れてしまう大和。また、ここでカウンターのタイミングを逃すのも経験のなさ故か。

なんとか爪をガードしてみせるが、押し負けてそのまま押し倒されてしまう。

「くっ！……かはっ」

受身もなしに背中を床に叩きつけてしまい、僅かに呼吸が苦しくなる。だが休憩などあるはずもなく、すぐさま喉元に喰らい付こうとする獣の牙を反射的に左腕で庇う大和。

「ぎぃ！」

左手首付近に、牙が食い込む。

大和の顔に降る、血と涎と生臭い息。

「このっ！！」

攻められ続けるわけにはいかないと、大和は喰い付かれていることを利用してそのまま地面に叩きつけた。

ズガッという鈍い音。

獣の口が僅かに開かれた隙に大和は自らの腕を引きずり出し、獣のどてっ腹に蹴りを入れてマウントポジションから引き摺り下ろす。その後すぐに体勢を立て直し、飛び退くようにして距離をとった。

「はぁ、はぁ、はぁ、っ――」

戦えている。

攻撃をくらいながらも、ズブの素人が戦っている。

大和は確実に互角並みの戦いを繰り広げている。

その事実が、大和の根拠のない自信を確信へと変えていき、思考

を麻痺させている。

大和の動きは、決して実戦に裏打ちされたものではない。

その道の達人や、戦い慣れしている人物から見れば、戦いというのもおこがましい立ち回りだろう。だが、大和が今相手取っているのは人ではなく獣だ。

獣の爪が迫ればかわし、反撃。

獣から攻撃が来る前に、攻める。

たったそれだけの稚拙な戦いだが、人間よりも遥かに高い身体能力をもつ獣に対して接近戦を仕掛け、互角に近い戦いを繰り広げることは、恐ろしく異状だ。

「――ふ」

その異状を経験している当の大和は、いまだ酔ったような高揚感の中にいた。

「ふは、ははは っ」

その感覚に笑みすら浮かべてしまうほどに、その気分に酔いしれていた。

戦えている、という確信が胸の内で大きくなるにつれ、自分の中の得体の知れない力の使い方が解き明かされていくような。――そう、子どもの頃ヒーローごっこをして遊んだときの気持ちに良く似ている。

強大な悪に立ち向かうため、秘めた力が解放される。そして、そ

の凄まじい力で、いともたやすく悪を討ち滅ぼし勝利を手に入れる。
そんな、子どもの空想の中だけに許された、なににでも対抗できる力。それが、今まさに現実として自身の内に滾っている。

……やれる。
これならこの犬モドキだけじゃなく、あの俺のそっくり野郎も。

「殺れる」

まずは手始めに、

「お前からだ、犬っころ！」

しかし、興奮して啖呵をきる大和とは裏腹に、獣は幽鬼のように立ち上がった。

大和は気づいていない。
大和の異変もさることながら、獣にも変化が起きていたということに。

耐え難いほどの飢えに苦しみ、久しぶりの肉と血の味に全身がもっと寄越せと歓喜し、生死の境を行き来するような戦闘で、獣も“生きる”という本能をすり減らし、研ぎ澄ましていた。

ヴォア　ゞ！

この咆哮の意味を大和は知らない。
この状況下で見せる獣の変化を大和は捉えていない。

――獣の目が濁っている。

どこを見ているのか分からないその瞳が大和を睨み、鼻をひくつかせる。口の端から大量の血の混じった涎を垂らし、それすら美味いとでもいうように舐めとっては、喉を鳴らす。

意識などなくなっている。
あるのは本能、食欲という無尽蔵の欲望。

大和が獣の頭を叩きつけたことで、僅かに残っていた獣の理性が吹き飛んだ。

――獣は、進化した。

「……え？」

大和の口から僅かに疑問の声が漏れたのは、首筋から右肩にかけての肉が食いちぎられた後だった。
がくんと膝をつき、そのまま崩れとそうになる体を、手を床につ

き四つん這いのかたちで踏みとどまらせる。その拍子に床に大量の血が滴ったのが大和の目に映った。

「ぁぐ、……ぁ、あ」

見えなかった。

大和は愕然とする。

全く見えなかったのだ。決して注意を逸らしたわけでもなかった、油断したわけではなかった。けれど目で追うことが出来なかった。

導かれる結論は、獣の速度が飛躍的に上がったということだ。そして、先までの速度にやっと目が慣れてきていた大和にとって、その急な変化は不意打ちとなった。

「あ　りかよ、そんなの」

顔を反らすようにして獣を見ると、ちょうど食いちぎった肉を飲み込んでいる瞬間だった。そして、食事の余韻など感じず、僅かな挙動で大和へ飛び掛る。

「っ！！」

反射的に転がって避ける。が、爪が背中の一部を奪っていった。

最大限に集中すれば見える。

しかし、避けるには反応も動作も遅すぎる。

「がっ！」

そして避けたと思って体制を立て直し終わる頃には、第二撃目が襲って来ている。
今度はわき腹に噛み付かれた。捕まえようと手を伸ばす頃には、食いちぎって距離を保っている。さっきまでの戦いの経験から本能的に接近戦は避けているのか、その距離を詰めようとはしていない。中距離から致命傷になる箇所を狙うように攻撃している。

首の太い血管を食われ、腹部を噛み千切られ、それでも大和が絶命しないのは一重に不気味ともいえる超速再生のお陰にほかならない。でなければとっくに死んで獣の腹の中だ。

「……っ！　……ぅっ！　……っ！　……！　……ぁ！」

首、腹、腹、太腿、首。
次々に襲われ大和は必死に回避行動をとる。が、完全に避けきるには僅かに間に合わず。体を傷つけられるか、食われている。

間に合わない。
対応できない。

だが不思議と絶望が大和を覆うことはなかった。
“不可能”を“可能”に出来るという、確信へと成長した気持ちが、大和に生き残るための術を探す支えとなっている。

「……っ、ぐぁ、……ふぅ゛！」

対応できないのなら、強引に対応できるよう相手を引き摺り下ろ

してやればいい。
動きが速すぎてついていけないのなら、どうにかして失速させてやればいい。
問題はどうやって足止めをするか。
「げぇ……、ぁっ……、……！」
かくん、と肩膝が折れて、また倒れそうになる体を支えるため、左手が血溜まりにつく。
左手？
あった。
一度だけ、相手の動きを止められる方法が。
だがアイデアをじっくりと思案する時間などない。これで決める。この方法で決着をつける。
集中し、相手の飛び掛りのタイミングを逃すまいと身構える。
そして、その時がやって来た。
迫りくる牙。
その牙を避けることはせず、大和はその口目掛けて左腕を突き出した。その拳は、そのまま獣の口の中へと飲み込まれ、ぐじゅり、

と喰われる。

「ふ、ぐぅ、……ぁぁ」

だが、すぐに食いちぎられることはない。

バキッ、ベキッ、と骨の砕ける音がした。このままにしておけば、あと5秒ほどで左腕は消える。その前に、大和は獣の全身を思い切り床へと叩きつけた。

「あ゛あ゛あ゛！！！」

マウントポジションを奪い取り、手を引き抜く。

聞いたこともないような音と共に出てきた左腕の先に掌は付いていなかった。骨を完全に絶たれ皮だけで繋がっていたのを強引に引き出してしまったからだろう。

だが、そのことを気にして入られない。

生きるために左手を犠牲にしたのだ、もうここで息の根を止めなければいけない。

「――っ！――っ！――っ！」

獣の頭を殴る。

馬乗りになって、全体重をかながら殴り潰す。

「――っ！――っぁ！――っっ！――っ！」

何度も、何度も、殴り潰す。

牙が飛ぼうが、顎が砕けようが、頭蓋が割れようが、獣の中身が飛び出そうが殴り潰し続ける。

やがて、獣の悲鳴がすっかり消えてなくなってだいぶ経ったころ、大和の手が止まった。

不恰好ながら、なんとか大和はこの訳の分からない戦(けんさ)いに勝ったのだ。

◆8話（後書き）

もっと長いこと戦わせようか考えたんですが、プロローグを１０話までに終わらせたいのと、物語の進みが悪いのを考慮して無理矢理収めました。

１話をもっと長いこと書くことも考えました。ですが、際限なくダラダラ書いて、下手くそな文を長いこと読んでもらうのもどうかと思うので、このまま１話３０００～３５００字程度で書いていこうと思います。

とりあえず、ここまで。
次はいつになるか分かんないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2343w/

見知らぬ世界にて、

2011年10月6日01時51分発行